

# 2012年の主要水産物の需要と供給

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量								価 格						
	生 産	産地	食用 加工	輸 入	輸 出	東 京	缶 びん詰	在 庫	生産額 (億円)	産地	輸入 (億円)	輸出 (億円)	東 京	魚介類消費 支出1世帯	為替 レート
23	4,765	1,675	1,723	2,693	424	528	108	866	14,209	158	14,541	1,738	857	78,744	79.80
24	4,840	1,673	1,728	2,721	440	524		932		158	15,016	1,700	848	77,803	79.80
%	102	100	100	101	104	99	0	108		100	103	98	99	99	100.00

## 数 量

本年の国内生産量は東日本大震災の影響もあった前年とほぼ同水準であった。

全体的な特徴としては徐々に漁獲が増えてきている伊豆列島周辺で好漁がみられたビンナガと震災後の漁港の復旧も徐々に進み震災前の水揚げ港に水揚げされたメカジキ、マカジキ、犬吠埼近海や東シナ海で好漁であったサバ類の生産が伸びた。

大きく増加した魚種は、上記ビンナガ、メカジキ、マカジキ、サバ類、冷凍カツオ、スケトウダラやマダイ、タコ類も数量を伸ばした。大きく減少した魚種は、まき網が不振であったクロマグロやイワシ類（マイワシ、カタクチイワシ、ウルメイワシ）、主力の東シナ海や山陰沿岸が不振であったマアジ、羅臼沿岸やオホーツクが不発に終わったスルメイカ等であった。

輸入は、為替は前年並みであったが、272万トンと前年をやや上回った。

本年は、目立って多くなったのはタラや、養殖系が好調であったサケ・マス類、そしてソマリア沖で好漁であったメバチ、西アフリカ沖でタコ類、タラバ、ズワイの搬入が多かったカニ類の増加が目立ち、目立って減少したのはカツオやジャポニカ種の減少が言われているウナギ等で、他は横ばい圏の魚類が多かった。

近年増加基調が続いていた輸出は、本年は44万トンで為替円高推移や原発事故による各国の輸入規制も徐々に緩和されたこともあり前年（42.5万トン）をやや上回った。

国内生産が好調だったビン長が目立って多くなった他、イワシ類、ホタテ等も数量を伸ばし、東日本大震災（原発事故）の影響もあって昨年大きく減少したサンマやサバ類も数量は回復過程にある。

東京の入荷量は、52.4万トンでほぼ前年（52.8万トン）並みで、生産量に対応していた。

月平均在庫量は、93万トンで前年（87万トン）を上回った。（前年は三陸の冷凍冷蔵庫が被災により在庫喪失していた）

## 価 格 ・ 金 額

本年の産地価格の特徴は、東日本大震災により節電や自粛の影響等もあって生産量が横ばいであったこともあり、比較的落ち着いた展開で個々の魚種の生産の増減が反映した価格推移になった。しかし冷凍ビンナガや冷凍カツオのように、国際市況（缶詰）の動向に左右される魚種は顕著な価格上昇がみられた。

東京消費地価格は、848円で入荷減少を反映し引続き前年（857円）をやや上回った。

輸入金額は、1兆5,009億円（前年：1兆4541億円）で前年を468億円上回った。

輸出金額は、1700億円で引続き前年（1738億円）を38億円下回った。

## 円 レ ー ト

24年の円レート（対USドル）は、年平均80円で前年（80円）並みであった。

円レートは、85年の9月のプラザ合意以降一時的な円安がみられたものの急速な円高・ドル安傾向が10年間続いた。

しかし、95年秋から円安に転じ、97年以降に証券会社、銀行の倒産が続き金融システム不安等も重なり一層円安が進行し、98年も一時140円台の安値を記録するなど秋口まで円安が進行した。その後、一時年末にかけて円高（113円）へと反騰したが、99年は夏場までやや円安（114～121円）で推移したが、下半期には急激に円高に反騰し、12月は103円まで急騰した。2000年は年末の円高の103円からスタートで、一時的な円高はあったが、基本的には円安傾向で推移し、年末には111円まで下げた。01年は長引く不況や銀行、ゼネコン、流通分野での倒産、再編もあり、年を跨いで急激な円安が進行し、9、10月に119円とやや円高に戻したものの、12月には124円と円安に急落した。02年には131円の円安から始まってその後円高に転じ、8月に118円まで上昇したが、一向に景況感の低迷もあり12月には122円まで下げた。その結果、為替は10年前の水準まで戻した。03年は年初の119円から始まり9月までは2円前後の幅での小さな動きであったが、10月に111円と急騰し、11、12月と小幅円高で推移し108円まで上げた。04年は年初106円の円高で始まり、5月に112円の円安に振れたが、その後は円高に転じ11月以降は104円、103円まで上げた。05年は年初の103円から下半期には円安に変わり7月には110円まで下げ、その後一貫して円安で推移し、12月には119円まで下げ、年末には若干円高となり117円台で推移した。06年、年初は引続き円高の116円でその後も117円とやや円安で推移していたが、5月に112円と円高に振れたが、それ以降は11月の119円までじり安推移し、11、12月と若干の円高に戻した。07年は年末以上に円安の121円に始まり、6月には123円まで円安が進行した。しかし米国のサブプライムローン等の影響もあって、7月以降は円高に振れ、11月には110円まで進み、12月には112円にやや円安となったが、基本的には下半期は円高基調になった。

08年は、年初から円高となり、3月100円まで円高が進んだその後は8月まで円安に振れたが、9月のリーマンショック以降の世界金融危機の拮がりの中で円は急騰し、12月には91円まで上げた。2009年は90円の円高から始まり、4月には99円の円安となり、その後は円高となり、11月には90円を割り、12月には一時84円台を記録するなど、円高が進行した。

10年は当初は91円の円安で始まり、6月まで90-93円の幅で進行したが、下半期に入って87円と90円を割り、その後も円高は10月の82円まで進み、12月の83円とその後若干戻したものの、円高が際立った。11年は年初83円から始まり6月には81円台まで上昇した。下半期に入るとギリシャの金融危機からEU全体の金融不安が広がり、相対的に信用がある円が買われ、9、10月は77円台まで円高が一層進んだ。その後78円まで戻したが、下半期の円高は際立っていた。12年は、12年は年末からの円高が一層進み、76円台まで進んだ。その後はギリシャの民間債務減免もあって、一時的な危機回避策でユーロも値を戻し、円安に振れ3月には82円台まで進行した。その後ギリシャの政治的不安定性もあって再度円高に振れる動きが顕著

になり9月の78円台後半まで進んだ。しかしその後は、日本国内で総選挙を巡る攻防の中で自民党有利とのメディアの発信の中で12月総選挙の圧勝もあり自民党が政権奪取に成功した。選挙期間中のその経済政策の中で為替問題にも言及したこともあり、10月以降円安に振れ12月には83円台まで円安が進んだ。

(参考：84年237円→85年240円→86年170円→87年146円→88年128円→89年137円→90年145円→91年135円→92年127円→93年112円→94年102円→95年94円→96年108円→97年121円→98年131円→99年114円→2000年107円→2001年121円→2002年126円→2003年116円→2004年108円→2005年110円→2006年116円→2007年118円→2008年103円→2009年94円→2010年88円→2011年81円→2012年80円)

### 石油価格（1kl当たり）

24年のA重油価格は、年初は年末より一段上げ67,500円の高値で始まり、中旬には68,500円にじり高となり、2月中旬69,500円、3月上旬73,500円、3月中旬75,500円が4月上旬まで続いた。しかし4月中旬には74,500円、下旬73,500円、5月中旬71,500円、下旬69,500円、6月上旬68,000円、下旬65,000円とじり安展開で推移した。しかし7月に入ると再度上昇し、下旬66,000円に上げ、直ぐ中旬65,000円に下げ、再度下旬66,000円まで上げた。そして8月中旬71,000円、下旬に入ると72,000円、9月上旬73,000円に上げたが、下旬70,000円と下げ11月中旬まで続いた。12月に入ってから円安も顕著になったこともあってか下旬72,000円、下旬74,000円、年末は75,000円に上昇した。

参考：近年の最高値74,000円/k1（1982年11月）75,000円/k1（2007年12月）、115,000円（2008年7月）